カンボジアへ
――国連児童基金（UNICEF）の活動を通して――

米山周作

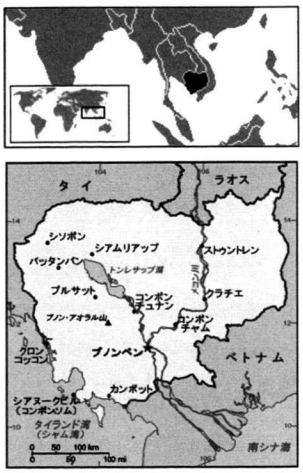
1975 年 4 月 17 日．

ポル・ポト率いるクメール・ルージュが首都プノンペンに入城．旧来の社会制度や価値観を根本から破壊し，急進的に，無計画に，極めて原始的な共産主義社会を建設しようとした．1979 年 1 月のポル・ポト政権崩壊までに虐殺された人々の数は 170 万と言われ，これは当時のカンボジア総人口の 3 分の 1 にあたるとされる．その後の難民の発生，内戦，そして 1991 年のパリ和平協定締結に至るまで，時代に翻弄された人々の数は計り知れない．その傷跡は 17 年が経過した今なお，人々の心の中にも社会の中にも残り，残存のポル・ポト派指導部も裁かれていない．

筆者は学習院国際交流基金からの研修費を受けて，平成 19 年 7 月 22 日(日)から 29 日(日)までの 8 日間，日本ユニセフ協会主催のカンボジア視察研修に参加した．日本全国から 11 名の小・中・高の教員が集まり，国連児童基金（以下，ユニセフ）カンボジア事務所の活動を視察するというものである．本稿では，第 1 部でカンボジアの概要について簡潔に説明を行い，第 2 部でユニセフ・カンボジア事務所の取り組みを紹介し，第 3 部でカンボジア視察を終えた感想を率直に綴りたい．

第 1 部　カンボジア概要

1–1　基礎データ



位　置	左図参照
国　旗	中央に描かれているのは世界遺産のアンコール・ワット
面　積	日本の半分（20 州 4 特別市による行政区分）
人　口	約 1,400 万（45%が 18 歳未満）
首　都	プノンペン（人口約 100 万）
気　候	熱帯モンスーン（乾季と雨季の 2 つの季節）
言　語	クメール語
民　族	クメール人（90%），ベトナム人（5 %） 中国人（1 %），その他（4 %・少数民族）
宗　教	国民の 9 割以上が仏教（上座部仏教）
通　貨	リエル（外国人は通常米ドル）

1–2 貧困データ

	カンボジア			日　本		
所　得						
国民総所得（100万ドル）	4,808【2004】			4,988,209【2005】		
一人あたり所得（ドル）【2005】	380			38,980		
保　健・栄　養						
1歳未満児死亡率（出生1000人あたり）【2003】	97			2		
低体重児出生率割合（%）【1998–2005】	11			8		
専門技能者が付き添う出産（%）【1997–2005】	32			100		
改善された水源を利用する人の比率（%）【2004】	全国	都市	農村	全国	都市	農村
	41	64	35	100	100	100
適切な衛生施設を利用する人の比率（%）【2004】	全国	都市	農村	全国	都市	農村
	17	53	8	100	100	100
病院1ベッドあたり人数【2007】	1,367			69		
医師1人あたり人数【2007】	6,610			485		
HIV感染率（15歳～49歳）（%）【2003】	1.9			—		
教　育						
成人識字率（女性／男性）【2004】	64／ 85			100／100		
初等教育就学率（女子／男子）【2000–2005】	96／100			100／100		
中等教育就学率（女子／男子）【2004】	20／ 31			100／100		
人　口						
出生率（人）【2005】	3.9			1.3		
人口の年間増加率（%）【1990–2005】	2.5			0.2		
都市人口の比率（%）【2005】	20			66		

出典：世界子ども白書2007，ユニセフ・カンボジア事務所資料，アジア開発銀行・世界銀行発表より

貧困の指標は様々だが，アジア開発銀行や世界銀行の数字では，カンボジアはアジア20ヶ国中，国民総所得では18番目（19位ラオス，20位モンゴル），一人あたりの所得でも18番目（19位ミャンマー，20位ネパール）に位置する．アジアの最貧国の1つであることは明らかだ．

また，先進国でも問題になっていることだが，カンボジア国内における都市と農村の格差も見逃すことはできない．安全な水を利用できる人の比率は，カンボジア全土では41%だが，首都プノンペンは92.2%，西部のパーサット州は9.6%である．トイレを持つ家庭の比率は全土では21.9%だが，プノンペンは87.1%，プノンペン東部のプレイベン州は6.8%である．

プノンペンの街並み

プノンペン市内

農村部

農村部

プノンペンは政治と経済の中心地として美しく整備され，モダンな建物が整然と建ち並ぶ中に，緑の公園，荘厳な寺院，マーケットが点在する．活気のある 100 万人都市である．また，アンコール遺跡観光の拠点となるシェムリアップも，高級ホテルやレストランがひしめき合い，外国人観光客で賑わう近代的な街である．こうした街から車で 1 時間と走らずに，道は凸凹になり，水もトイレもない高床の家が点在する森や田園風景が広がっていく．

1–3　歴史

1–3–1　概要

カンボジア史を語る遺産として，世界遺産のアンコール遺跡が挙げられる．森の中で，崇高に，穏やかに時間が流れる広大な寺院周辺は，心が落ち着かされる空間である．12 世紀の建造物だけあって破損も多いが，各国の政府や民間団体がその修復に取り組んでいる．人類遺産の維持のために，各国がそれぞれに資金と技術を提供している事実は喜ばしい．

アンコール王朝の栄華はカンボジアの誇るべき史実であろう．その一方で，カンボジアは人類史上最悪の悲劇をも併せ持つ．1975 年 4 月 15 日から 1979 年 1 月 7 日までの 3 年

8ヶ月20日間，ポル・ポト政権は170万人を虐殺したとされる．毎日1270人が殺害されていた計算だ．このポル・ポト時代は現在のカンボジアを語る上で極めて重要な意味を持つため，ポル・ポト時代とその前後についてここで簡潔に記したい．次の年表は筆者の考える重要史実を極めて簡略化したものである．

9c～15c	アンコール王朝
1863	フランス保護領カンボジア王国に
1953	フランスから独立　⇒シアヌーク（国王）政権へ
1970	ロン・ノルがシアヌーク政権打倒，王制廃止　⇒ロン・ノル政権がクメール共和国樹立
1975	ポル・ポト派がロン・ノル政権打倒
	⇒シアヌーク＋ポル・ポト政権樹立　⇒原始共産主義（農業復興，通貨廃止）　⇒大量虐殺
1979	ヘン・サムリン＋ベトナム軍がポル・ポト政権打倒　⇒ポル・ポト派タイ国境へ敗走　⇒内戦へ
1991	パリ和平協定
1992	国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）成立　⇒PKO法による自衛隊支援
1993	総選挙　⇒ラナリット第一首相・フン・セン第二首相による連立政権成立
1997	ラナリット派VS.フン・セン派　武力衝突
1998	総選挙　⇒フン・セン首相（連立政権）　　ポル・ポト死亡
2003	総選挙　⇒フン・セン首相（連立政権）
2004	シアヌーク国王引退，シハモニ国王即位

1–3–2　ポル・ポト青年

1925年，地方の裕福な農家で生まれたポル・ポトは，6歳で親元を離れ，プノンペンで僧院生活を送る．その後カトリック系小学校，全寮制の中学校，技術専門学校等を通して，当時の宗主国だったフランスの教育，いわばエリート教育を受けて育つ．学生時代から政治活動に参加し，1949年には政府奨学金を受けて3年余りフランスにも留学する．この留学時代に彼は共産主義に傾倒していく．

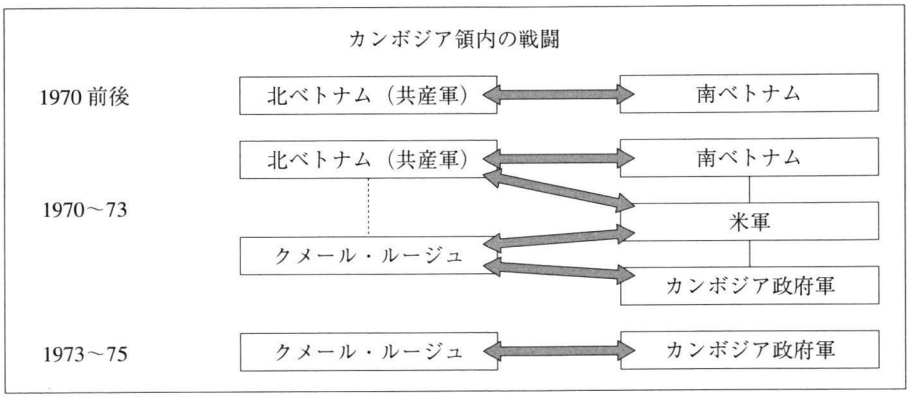
ポル・ポトは帰国後，人民革命党の党員として活動しつつ，私立高校の教員となる．フランス文学や歴史の教師として，偉ぶらず，穏やかな先生として生徒の間では人気があったという．政治活動を通して党内序列の階段を着実に上り，1963年，ポル・ポトは党の書記長として実質的なナンバー1となる．1965年，ベトナム，ラオス，中国，北朝鮮を1年以上かけて回り，1966年にベトナム戦争激化の飛び火がプノンペンに達した際には，

北東の辺境であるラタナキリ州へ党活動の拠点を移す．周辺諸国を回り，少数山岳民族のラタナキリに移り住んだことで，ポル・ポトは原始性の素晴らしさ，文明の腐敗文化にまみれていない「知識のない良さ」を感じ，後の悲劇となる極端な共産主義へと突き進むことになる．

1–3–3　ポル・ポト政権成立の背景

1970 年 3 月，米国の支援を受けた当時のロン・ノル首相は，外遊中のシアヌーク国家元首に対する無血クーデターを引き起こし，「クメール共和国」樹立を宣言した．ベトナム戦争が泥沼化していた当時，ベトナム共産軍がカンボジア国内にも入り込んでおり，カンボジア領内でのベトナム人同士の戦闘，南ベトナム支援の米軍，ロン・ノルのカンボジア政府軍，そして，ポル・ポトがジャングル内から指揮を執る共産主義ゲリラ（以下，クメール・ルージュ）が入り乱れ，混乱が起きていた．中立を貫こうとするどっちつかずのシアヌークの姿勢は，国内外の指導部の反発を招き，結果的に政治の場から追放されたのである．

ロン・ノル政権発足後も，米軍はカンボジア領内のベトナム共産軍一掃のための爆撃を続けた．村への誤爆も多かったため，政府軍や米軍への復讐のためにクメール・ルージュに加わる若者や，また，国民の間では絶大な人気を得ていたシアヌークとクメール・ルージュが手を組んだため，民衆の幸福を純粋に信じてクメール・ルージュに身を投じるものもいた（後にシアヌークは自分がポル・ポトに騙され，利用されていたことに気づく）．1973 年 1 月，ベトナム和平協定が調印されると，ベトナム軍も米軍もカンボジアから撤退する．ここでカンボジア領内の戦いは，ベトナム軍も米軍もいない，政府軍 VS. クメール・ルージュという文字通りの内戦となるのである（下図参照）．米軍の後ろ盾のない政府軍は弱体化し，その一方でベトナム共産軍が残した勝利への道筋がクメール・ルージュには整えられていた．政府軍劣勢のなか，クメール・ルージュはロン・ノルからの和平提案にも一切応じず，プノンペンへと攻め続けた．1975 年 4 月，ロン・ノルは亡命，政府軍は完全降伏，クメール・ルージュは民衆の大歓声のなかプノンペンで迎えられる．「ク



メール・ルージュがベトナム軍と米軍を追い出し，カンボジアを解放した」と．これがポル・ポト独裁政治の始まりである．

1–3–4　ポル・ポト政権

右に挙げたものは，ポル・ポトがプノンペン入りした直後から断行した政策である．前述の通り，ポル・ポトは文明社会を「腐敗」と考え，旧来の伝統的価値観や社会体系を完全に否定し，農業だけに依存した国家建設を目指した．余剰米による外貨獲得が不可欠だったはずだが，計画性も高度な農業技術もなく，全土で大灌漑工事を行い，大量の労働力を投入するだけの，極めて非現実的な政策だった．ポル・ポト政権指導部に農業経験者がいたわけでもなく，稲作環境の全く違う中国の見よう見まねに過ぎなかった．人々も土地も疲労したが，異を唱えるもの，特に高学歴者，留学経験者，宗教指導者などは反逆者として容赦なく殺害された．政権指導部にはフランス留学帰りの元教員，いわゆるインテリが多かったが，民衆には単純な肉体労働だけを求め，知識教育を全く軽視した．小学校教育は1日30分程度で，子ども達に革命の歌やスローガンを叩き込んだり，水牛や牛の番，土運びをさせたりするだけで，中学校教育は全く存在していなかった．また，ポル・ポトは旧来の家族観を一切否定した．「(政権は) 小さな子や青少年男女の父であり，母である」として，子ども達は幼児のうちから親から引き離され，集団子ども労働キャンプに入れられた．政権にとって，ものを何も知らない，頭の中に旧来の知識や外国の知識を持たない子どもは「大人よりも信用でき，使い捨てが利き，便利」だったのである．「子ども兵士」だけでなく，文字の読めない「子ども医師」も多くいたとされ，この時代の病死者の多くは言い加減な治療や投薬によるものとも考えられる．

1. 都市住民の農村への強制移住
2. 都市の無人化
3. 農村での強制労働
4. 市場・通貨の廃止
5. 学校教育の廃止
6. 新聞・テレビ・ラジオの廃止
7. 宗教活動の禁止
8. 文化・伝統・芸能活動の禁止
9. 移動・通信の禁止
10. 家族の別離・集団生活化
11. 書物の焼却
12. 反体制派，知識階級の虐殺

反体制派，またはその疑いのあるものは，収容，尋問，拷問，処刑の場として名高かった，プノンペン市内のツールスレン監獄に送られた．現在ではポル・ポト時代の悲劇を後世に伝える博物館となっているが，元々は高校の校舎だった建物である．独房，拷問部屋，拷問道具などが生々しく残る．政権内の裏切り者，その疑いが持たれた幹部や家族，無名の男女，子ども達など，1万4000人以上が処刑されたと言われ，ツールスレンに送られて生還したのはわずか7人という．ポル・ポトの「恐怖政治」のシンボルだった場所である．

内戦中，クメール・ルージュと手を組んでいたシアヌークは，ポル・ポト政権成立後，名ばかりの国家元首として事実上の幽閉生活を王宮で送っていた．ポル・ポトにとって，求心力を持ったシアヌークの利用価値は大きく，シアヌーク国王の旗印は，政権樹立，政権運営のために国内外に対して必要なものだった．「共産主義と王制と仏教の調和のとれ

元は高校校舎のツールスレン監獄（現在は博物館）

（左から）ポル・ポト，ツールスレン所長，囚人

た国家建設」を純粋に目指していたシアヌークは，ポル・ポトの思惑に政権成立以前から気づいていたが，ポル・ポトの手のひらの上で踊るしかなかったようである．

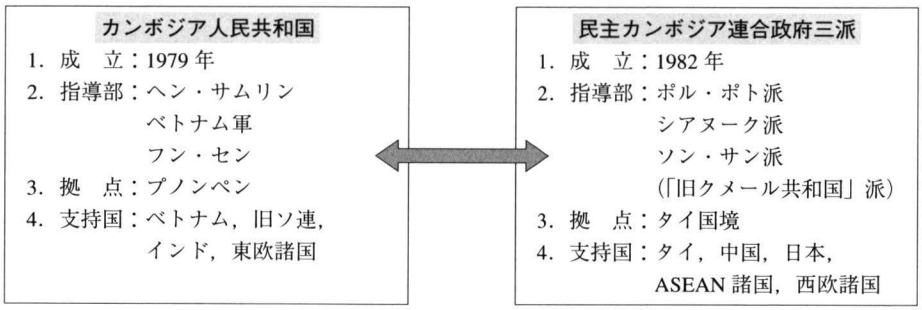
1–3–5　ポル・ポト政権の終わり

1978 年 12 月 2 日，ポル・ポト政権打倒を目指す戦線が東部国境地帯で結成された．ヘン・サムリンがベトナム軍と手を組み，現在の首相であるフン・セン，仏教徒や知識人も加わっていた．同 25 日，ベトナム軍 15 万人の大部隊が，東，北東，北のラオスから一挙に侵攻する．予想以上の快進撃で，翌年 1 月 6 日にはプノンペン攻略作戦が始まり，翌 7 日にはあっけなく完了．3 年 8 ヶ月 20 日間にわたったポル・ポトの独裁は，対抗勢力の結成からわずか 1 ヶ月，カンボジア侵攻からわずか 2 週間，首都攻略作戦の開始からわずか 2 日で，一気に終わりを迎えたのである．

1–3–6　パリ和平協定に至るまで

カンボジア国内に和平がもたらされるまでには，その後 10 年以上の歳月がかかることになる．ヘン・サムリン政権は，20 万のベトナム兵を各地に駐留させ，政府機関のあらゆる分野にベトナム人顧問を置き，完全なベトナム指導型社会主義政権となった．シアヌークは北京へ脱出し，ポル・ポト派はタイ国境地帯のジャングルへと敗走する．シアヌークは国際社会でベトナム軍を侵略者として非難し，ポル・ポト派はジャングルからの抵抗運動を続ける．ここに再び内戦が始まるのである．激化した 80 年代，タイ国境地帯には大量の難民が押し寄せたが，ポル・ポト派はそうした数々の難民キャンプを牙城とし，国際機関から届く難民救済用の食糧を得ていた．民衆の虐殺もやめ，対外的な政治 PR にも努め，国連の議席を守り続けた．1982 年，ポル・ポト派やシアヌーク派は「民主カンボジア連合政府三派」をタイ国境で発足させ，タイや中国の他，日本，ASEAN 諸国，米国など西側の支持を得る．一方で，カンボジア全土を実効支配するプノンペンのヘン・サムリン側「カンボジア人民共和国」は，旧ソ連，インド，東欧など東側の支持を得る．こうし

た二重政権状態，東西対立，社会主義国家内の対立のなか，「共和国」側に西側の開発援助は入らず，東側からの乏しい援助やNGOの支援だけで，疲労した国家の再建が取り組まれたのである．



1980年代後半，社会主義の衰え，東西冷戦の終焉に伴い，パリ，ジャカルタ，タイ，ニューヨークなどの各地で「共和国」側と「連合政府」側の和平協議が行われるようになる．1991年10月23日，パリでカンボジア4派と関係18ヶ国の代表が和平協定に調印し，内戦は終結する．

1–3–7　パリ和平協定

パリ和平協定では次のことが規定された．内戦の終結，カンボジア4派の武装解除，停戦の監視，タイ国境の難民の帰還，行政分野の管理，人権状況の監視，制憲議会選挙の実施，国連カンボジア暫定統治機構（以下，UNTAC）の設立などである．UNTACは1992年3月から翌年9月までの18ヶ月間を暫定期間とし，世界各国から2万2000人を動員して，選挙の実施，新政権の発足，その他あらゆる分野での支援活動を行った．日本も1991年に成立したPKO法に基づき，自衛隊，警察官，民間人など700名以上をUNTACに派遣している．UNTACの代表は当時の国連事務次長だった明石康氏である．

1993年5月に制憲議会選挙が予定通り行われ，旧シアヌーク派のフンシンペック党と旧フン・セン派の人民党が議席の大半を獲得．同年9月23日に新憲法が公布．翌24日，フンシンペック党のラナリットを第1首相，人民党のフン・センを第2首相，シアヌークを国王とする，連立政権の立憲君主国家が成立し，新生「カンボジア王国」が誕生した．

国際社会の仲介を経て新たに出発したカンボジアだが，その一方で，ポル・ポト派は和平協定調印後も武装解除には応じず，選挙前には襲撃や選挙妨害を繰り返し，選挙自体もボイコットした．その後もカンボジア北西部のジャングルで，懸命に，ほそぼそと抵抗を続けていたが，派内でも内紛が起こり，投降者も増えていた．勢力が弱まり，ポル・ポト自身もどんどん孤立していくなか，1998年4月15日，ポル・ポトは死ぬ．心臓発作とも，マラリアとも，毒殺とも，服毒自殺とも言われるが，遺体は死の翌日にあっという間に火葬されたため，その死因は未だ謎のままである．

1–3–8　ポル・ポト像

前述の通り，ポル・ポトは裕福なインテリだった．フランス留学時に権力欲に取り憑かれ，着実な一歩一歩で上り詰めた．文明を否定し，原始を重んじた．政権に就く以前から，民衆の前に姿を現すことなく，経歴も写真も一切公表していない．銅像や記念碑を建てたり，大演説をしたりして民衆に個人崇拝を求めるタイプではなく，あくまで隠れたままで指揮を執り，すべてを裏側から見つめていたのである．それは人間への懐疑心からくるものか元々の性格なのかは分からないが，常に暗殺や料理人による毒殺には警戒していたという．

その一方で，ポル・ポトと接したことのあるジャーナリストらによると，非常に柔和な微笑み，礼儀正しさやマナー，聴くものを魅了する話し方には感心させられたという．80年代，虐殺をやめた後のポル・ポト派の愛国心や規律の厳しさは，対外的に好印象すら与えていたという．1998年のポル・ポトの死後，当初は現地で火葬されて土に埋められただけだったが，ポル・ポトを慕う近隣の住民達が自主的に墓を建てた．ポル・ポトの妻と娘はこうも語っている．「世間がどう思おうと，優しい夫であり，優しい父でした」．民衆の家族観を否定しておきながら，自分の家族には甘かったようである．

1–3–9　歴史が現代に残したもの

ポル・ポト時代，国家建設の中核を担うべき人材が多く失われ，後に続く人材育成も行われず，基礎教育も経済活動も廃止された．内戦時代には大量の難民も生まれた．この歴史が現在のカンボジアの貧困に繋がっているのは明らかである．また，両勢力によって埋設された400万～600万個の対人地雷や，ロン・ノル時代の米軍による空爆の不発弾もそのまま地中に眠っており，今なお年間で平均450件の被害が報告されている．カンボジアの障害者の5分の1以上が地雷被災者の四肢切断者で，そのうちの3割は子どもだという．

厳しい時代を生き抜いた人々は，国際社会の思惑に翻弄されながら，虐殺の恐怖に怯えながら，家族，友人，人間の尊厳も奪われた経験を持つ．平和が訪れた現代も，心の中に深い悲しみと怒りを封印し，地雷や不発弾と隣り合わせで，貧困と戦いながら必死に生きている．この事実を決して忘れてはならない．

1–4　政治・経済

新生カンボジアの誕生後も，二人首相制の矛盾が噴出し，1997年にはフシンペック党と人民党の武力衝突も起こっている．再び国際援助が止まる事態にもなり，不安定な情勢が続くことになったが，1998年，2003年の2回の総選挙を経て，現在はシハモニ国王，フン・セン首相の体制下で安定している．2007年4月には第2回地方選挙が行われ，カンボジア史上類のないくらいに公正かつ平和的に執り行われたとして，民主主義の定着を表すものとなった．

2004年以降は年率10%以上の経済成長も遂げており，フン・セン首相の積極的な外国

企業誘致活動も期待される．しかし，人口 1400 万人という市場規模の小ささや，投資環境としての法や交通インフラの未整備は，大きなマイナス要因といえよう．また，カンボジアの主要産業としては農業，観光業，縫製業が挙げられるが，人口の 8 割が従事している農業は，カンボジアの GDP 全体では 30%程度に留まっている（2005 年）．工業が 25%，サービス業が 37%となっており，総人口の 20%の都市住民と 80%の農民との間で，所得格差は大きい．外国企業の経済活動は輸出入中心の貿易分野に偏重し，もたらされる恩恵は都市部に集中する傾向がある．また都市部内でも，外国企業の社員と公務員とでは賃金格差が大きく，公務員の副業の常態化や一部政府高官による汚職も取り立たされる．農村人口が今後も都市に流入していくことが予測されるが，それに伴う失業者やスラムの発生の対応策も急務である．政府にとっての課題は多い．

1–5　人身売買・HIV

カンボジアは 1999 年に ASEAN に，2004 年に WTO にも加盟し，政治的にも経済的にもグローバル社会の仲間入りを果たしているが，そうした環境のなかで新たに人身売買（以下，トラフィッキング）や HIV の問題が深刻化している．1980 年代末，市場経済化と対外開放に伴って性産業が復活した．その規模は年々拡大し，未成年者をも巻き込みようになり，その過程でトラフィッキングの件数も増加した．1990 年代末からは被害者はさらに低年齢化し，トラフィッキングの手口も巧妙化する．10 歳前後の少女が国境を越えて売買されるようになったのである．貧困がゆえに親が子どもをブローカーに売ったり，騙されて売春を強いられたりするケースが多いという．

またそれと併せて，売春女性との性交渉で客の男性が HIV に感染し，他の女性にもうつし，産まれてくる子どもも母子感染するという循環で，HIV 感染の拡大が社会問題化している．カンボジア全体の 15 歳～49 歳人口のうち，1.9%にあたる 12 万 3,100 人の HIV 感染が確認されており（2003 年），発症を抑える処方薬の確保が急がれている．1997 年の 3 %をピークに年々減少はしているものの，アジアでは最も高い数値である．

2001 年に 37 歳の日本人男性が児童買春でプノンペンで逮捕されているが，当時多くの日本人男性が買春目的でプノンペンを訪れていたことが報道されている．嘆かわしいことである．

1–6　文化

カンボジアが誇る伝統文化として，9 世紀のアンコール王朝で生まれた「アプサラ・ダンス」が挙げられる．アプサラは「天女」を意味し，アプサラ・ダンスは祈りとして神に捧げられる宮廷舞踊だった．ポル・ポト時代，伝統文化の継承や文化活動は一切禁止され，王室古典舞踊の教師や踊り子の 90%が処刑されたが，アプサラ・ダンスは生き延びた．生存した数人の教師らによって再び復活し，現在は観光客の人気を集めている．天女の動きを表す舞は，指や肘の動きが大変優雅なものである．

また，スバエク・トムと呼ばれる影絵芝居も，大変美しい伝統芸能である．平たく伸ばして乾燥させた牛革に人形を彫り，電球でライトアップしたスクリーン（白布）の裏側で，人形を操作しながらセリフを言う光と影の舞台である．

小学生によるアプサラ・ダンス

スバエク・トム

1–7　日本との関係

カンボジア人の親日感情は大変良い．カンボジアにとって日本は最大の援助供与国で，カンボジア人の間で「日本が支援してくれている」という意識は強いようだ．

日本語を学習する学生も多く，筆者がプノンペンの王立博物館を訪れた際も，日本語を学ぶ若者がひっきりなしに「～は日本語で何と言うのですか？」と質問を投げかけてきて，答えを熱心にノートに書き留めていた．筆者達の一行に同行してくれたカンボジア人通訳は，80 年代の難民キャンプで日本からやって来たボランティアに日本語を教わったという．日本での留学経験もなく，独学で学んだとのことだったが，その流暢さには驚かされた．日本企業のカンボジア進出が目覚しいわけでもなく，日本語習得が直接的に社会進出やビジネス・チャンスに結びつくわけでもないが，日本語の学習熱は高く，日本語学校も多い．今後，日本企業の投資や日本人観光客が増えるだろうという期待や，「カンボジアのことを知ってほしい」という純粋な願いがあるのだろう．日本語に堪能なカンボジア人は多く，プノンペンやシェムリアップの都市部では日本語の看板も多い．

2001 年に，東南アジアを流れる一級河川メコン川に日本の ODA によって橋が架けられ，物流を支える交通インフラとしてカンボジア経済に大きく寄与した．この橋はカンボジアと日本の友好を示す「スピアン・キズナ（きずな橋）」と名付けられ，2003 年発行の 500 リエル紙幣にも描かれている．ODA による最近の支援事例としては，日本の全面的な起草協力によって，2007 年 7 月に「民事訴訟法」が，同年 12 月には「民法」が国内で公布されている．カンボジアは法治国家としての法体系がまだ不十分で，日本は 1999 年から法環境の整備に協力を行っている．今後は法を運用するための法律家の育成や法学教育の充実に協力していくことになる．

第2部　ユニセフの取り組み

平成19年7月22日(日)から29日(日)までの8日間，ユニセフ・カンボジア事務所の活動視察ツアーに参加した．ユニセフの日本国内委員会である日本ユニセフ協会の主催するもので，国際理解教育を推進する全国の小・中・高の教員を対象に毎年行われているものである．昨年度は筆者を含めて11名が参加．現場での支援活動を視察することができただけでなく，それぞれが各学校で取り組んでいる教育活動の情報交換の場ともなり，非常に有意義なものとなった．

本稿第2部では，国連機関として特に子どもの支援を行うユニセフの概要と，カンボジア事務所の取り組みを紹介する．

2–1 ユニセフ概要

1945年，第2次世界大戦が終結し，世界中が心身ともに疲労した．その反省に立ち，平和を希求し実現する国際機関として国連が設立された．その翌年，特に子どもを支援する国連機関として，UNICEF（**U**nited **N**ations **I**nternational **C**hildren's **E**mergency **F**und）が誕生．国際問題は大人達の軋轢によって起こるもので，子ども達はどこの国籍であろうと罪はなく無力である．その前提に立って，政治的な理由に関係なく子ども達を支援するための機関となった．

UNICEF設立当初は，戦争後の緊急事態に対応するための基金だったが，子ども達の栄養不良という「緊急事態の慢性化」が世界各地で起こり，1953年，UNICEFから「International（国際）」と「Emergency（緊急）」の2語が落とされた．UNICEFという名称は世界的に認知されていたのでそのまま残ることとなり，ユニセフは「Silent Emergency（静かな緊急事態）」に対応する機関としてその活動が定義付けされた．筆者の個人的な見解だが，確かに西欧諸国と貧困国では「緊急事態」という言葉に対する温度差があるといえ

ユニセフ年表

1945 第2次世界大戦　終結
1946 United Nations International Children's Emergency Fund 創立
1949 UNICEFが日本への支援を開始
1953 United Nations Children's Fund（国連児童基金）に
　⇒ 国に関係なく，「静かな緊急事態」に対応
　⇒ UNICEFの名称はそのまま
1964 UNICEFが日本の支援を終了
　⇒ 学校給食用の粉ミルク，毛布，原綿等の衣類原料
　　医薬品等を提供
　⇒ 15年間で65億円相当の支援（当時の金額）
1965 UNICEFがノーベル平和賞受賞
2007年現在 156ヶ国を支援

ユニセフの使命

1. 保健
　…子どもの命と健康を守る
2. 栄養
　…栄養不良をなくす
3. 水と衛生
　…すべての人に安全な水を
4. 教育
　…すべての子どもが学校に行けるように
5. 保護
　…特に厳しい状況にある子ども達を守る
6. 緊急支援
　…戦争，災害から子ども達を守る

よう．2001 年 9 月 11 日の米国でのテロでは 6,000 人以上が亡くなり，世界中に衝撃を与えた歴史的な一日となったが，アジアやアフリカの貧困地域では毎日 3 万人の子ども達が飢餓や貧困で亡くなっている．いわば 3 万人の子ども達の死が日常化しているのだが，9. 11 ほどの世界の関心を引いているわけでもないと感じられる．

ユニセフは 1949 年から日本にも支援を行っており，1964 年までの 15 年間，学校給食用の粉ミルクや毛布などを提供している．2007 年現在，ユニセフは 156 ヶ国に支援を行っているが，国連加盟国が 192 ヶ国であることを考えると，支援を必要とする国の多さには驚かされる．

2–2　ユニセフ・カンボジア事務所の活動

ユニセフ・カンボジアは，2001 年より，カンボジア政府との協同で「セッコマー・プログラム」を推進している．「セッコマー」とはクメール語で「子どもの権利」を意味し，「セッコマー・プログラム」とは子どもの権利実現のための包括的な取り組みである．子どもの権利実現のためには，子どもを取り巻く地域社会全体の生活環境の改善が必要であり，保健衛生，食糧，水，収入向上などの支援活動も含むトータルな環境整備が目指されている．広範囲にわたる活動は，あくまで地域や家庭が主体となって参加する「住民参加型」である．5 ヵ年計画で進められるもので，現在は 2006 年－2010 年の 2 期目として 6 つの州，140 万人が対象となっている．ここにその活動の視察報告を行う．

2–2–1　視察報告①　コミューン

ユニセフは単独で活動を行うわけではなく，多くの関係機関と連携をとりながら，現地で暮らす人々とともに活動を展開している．カンボジア政府の農村開発省，教育省，女性省，内務省，計画省や，各地域の州政府は強力なパートナーである．また，最も重要なパートナーともいえるのが，現地の村落共同体（以下，コミューン）である．

コミューンとは複数の村からなる自治体で，カンボジアの最小行政単位として，最も住民に近い政府機関である．比例代表選挙によって選ばれるコミューン・チーフは，立法と

行政の両権限を併せ持ち，地域に必要な政策を自ら計画し実行する．村民から選ばれた村長が，コミューンとの橋渡し役として村民の意見を反映させていく．1コミューンあたりの人口は7,000～9,000人で，人口規模に応じて委員は5～11人．業務範疇は多岐にわたり，視察した下部組織「女性と子ども委員会」では，母子保健の促進，幼稚園・小学校の事業管理，家庭内暴力の対応なども司る．

コミューン事務所

2–2–2　視察報告②　保健センター

セッコマーの母子保健プログラムとして，保健センターの支援がある．保健センターと言ってもそのための建物があるわけではなく，巡回制の「青空保健センター」である．ユニセフの訓練を受けた保健スタッフが，月に1度の頻度で村を訪れ，母子のための健康サービスを提供する．病院のない村が多く，豊かな富裕層は州立病院へ行くが，そうでない住民はこの無償の保健センターを利用する．保健センターの巡回日時は回覧板やビラによって村民に知らされ，その日時に合わせて住民が集まってくるである．

木の下の巡回「保健センター」

カンボジアでは出生1,000人あたり97人の乳児が1歳を迎える前に亡くなっている(2003)．また母親に関しても，10万人のうち472人の妊婦が妊娠やそれに伴う病気で亡くなっている．乳幼児死亡率は特に農村部で，教育を受けていない母親の間で高く，助産師のいない不衛生な環境での出産や育児が原因とされる．ユニセフは妊婦への鉄分補給，母親教育，出産環境の整備，子どもの予防接種やビタミンAの普及，下痢などの病気対策と薬の支給，栄養指導などを通して，安全な出産と母子の健康管理を支援している．

訪問した保健センターでは，7名のスタッフが乳児の発育観察や予防接種にあたっていた．このチームは17村の14,720人を対象に活動しているとのことだった．手際良く進められる一連の保健サービスは，先進国の病院に見劣りするものではなく，大変感心させられる．しかし，月に1度の「青空センター」なので，母親としては，子どもの急病や雨季でも安心できる常駐の医師と建物を望んでいることだろう．

乳児の成長過程を伝える幕

母子手帳で発育を確認する保健スタッフ

予防接種を待つ母親達

保健スタッフによる予防接種

2–2–3　視察報告③　幼稚園

幼児教育の重要性は疑う余地もないが，国内の3歳～5歳のうち，幼稚園に通っているのはわずか10%である．ユニセフは幼稚園の設置，園舎や教具の整備，幼稚園教諭の研修などを通して，幼児教育の普及を支援している．幼稚園教育の主な目的は右の通りだが，小学校の中途退学率を減少させたい狙いも大きい．小学校の入学率そのものは90%と高いが，6年生まで続けるのは入学者全体の43%に留まっている（中学校への進学率は31%）．仕事のために学業を続けられなくなることもあるが，「勉強についていけない」，「集団生活に馴染めない」という理由も大きく，基礎的な学力や社会生活上のルールを就学前に身に着けさせておきたいのである．地域性もあるが，その成果は出ているようだ．親にとっても，子どもが幼稚園に通い始めてから「挨拶ができるようになった」，「家の手伝いをするようになった」，「幼稚園で習った歌や踊りを教えてくれる」など，家庭内でのコミュニケーションが増えたとして喜ばれている．

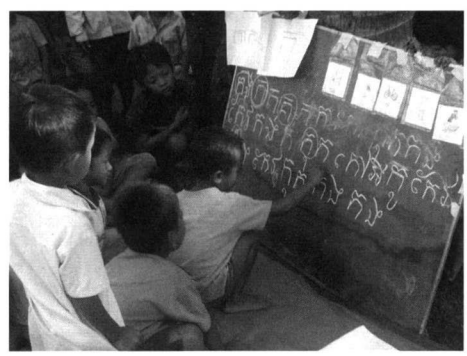
幼稚園教育の目的

基礎的な識字教育（読み書き）
情操教育（音楽，踊り等）
衛生教育（手洗い，歯磨き等）
集団教育（同年齢の子ども達との交流）
しつけ（挨拶，親の手伝い等）

授業は，木曜日と日曜日を除く1週間に5日，朝7：00～9：00の2時間行われる．広場に敷物を敷いて，黒板等の教具を置くだけの「青空幼稚園」もあれば，屋根の建てられたものもある．州教育委員会の専門家（テクニカル・ティーチャー）が教育課程を編成し，幼稚園教諭の研修や指導も行っているが，このテクニカル・ティーチャーの研修や指導はユニセフが行っている．また，衛生教育の推進や安全な水の確保のために，ユニセフが井戸を設置しているところもある．

幼稚園普及の大きな課題として，幼稚園教諭の待遇改善がまず挙げられるだろう．幼稚園教諭は完全に無給か，給与が支払われていてもごく僅かなので，ボランティアとしての善意に頼る部分が極めて大きい．園舎の問題もある．「青空幼稚園」は雨天休園となり，雨季にはそれが長引いてしまう．また，親の幼児教育に対する無理解も未だ大きい．子どもを幼稚園に通わせたがらない親も多く，今後も地域での継続的な啓蒙活動が期待される．

青空幼稚園



クメール文字の練習

屋根付き園舎

歌と踊り

2–2–4　視察報告④　小学校

ユニセフでは，支援を行う学校を「子どもにやさしい学校（Child Friendly School, 以下 CFS）」に指定し，右の6つの目標に向けて活動を行っている．現在，6州517校の26万人の子どもが支援対象となっており，様々なかたちで高い成果を挙げている．学校によっては，他の国連機関の支援，諸外国のODA，民間の資金援助などが入っていることもあり，関係機関と連携を取りながらの効率良い支援が目指されている．訪問した3校のCFSを通して，CFSの6つの目標に向けた取り組みを紹介する．

CFSの6つの目標

1. 全ての児童の就学
2. 教師の質の向上
3. 安全で衛生的な環境整備
4. 男女平等の実現
5. 家族や地域の学校活動
6. 効果的なネットワーク作り

カンダク小学校

クロン小学校

サンコール小学校

＜目標1＞　全ての児童の就学

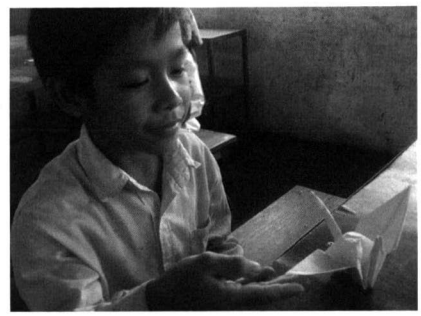
貧困，障害，民族，性別などに関係なく，就学年齢にある子ども全員を学校に通わせるための取り組みが行われている．貧困家庭にとって子どもは重要な労働力のため，子どもの就学に消極的な親も少なくない．ユニセフはコミューンや地域とともに，全ての子どもが6歳になったら小学校に入学できるよう，親の教育に対する意識を高め，入学を促すキャンペーンを展開している．特別にケアを必要とする障害児のための指導法の研究，学校施設の整備も支援する．

それでもなお，貧困の深刻さによっては，どれほど教育の価値を理解していても，子どもを学校に通わすだけの余裕がない家庭はある．また，親が出稼ぎに出ていて，弟や妹の世話のために学校の来られない子どももいる．そういった，就学年齢にありながら学校に通うことができていない子どもが，地域内で何人，どこにいるかの調査を行い，その対応も検討されている．

成果は出ており，現在のカンボジアの小学校入学率は90%と高いが，前述の通り，中途退学率も高い．「小学校に入れる」ところまでは実現しつつある今，「いかに続けさせるか」が次の課題だとユニセフ担当官は話す．

また，就学児童が増えれば，当然それを収容するだけの大きな校舎も必要になってくる．

ほとんどの小学校ではそれだけの容量がなく，各学年の半分が朝7時から11時までの午前，残り半分は13時から17時の午後という風に，午前と午後の2部制を採用している．午前の部では，朝食を給食として配給している学校もあるので，全児童の公平性を保つために午前と午後の部の入れ替えも定期的に行われる．授業は45分授業が4コマあり，国語（クメール語），算数，理科，社会の4教科が教えられる．



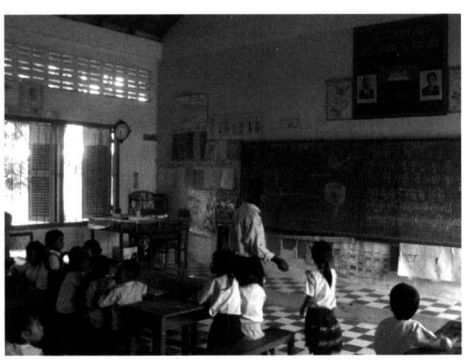
鶴を折ってみせてくれた男の子

＜目標2＞　教師の質の向上

子どもが学校を続けていくためには，学校が子どもにとって楽しく，学びのある場でなくてはならない．ユニセフでは教育の質的向上を目指して，州の教育委員会やコミューンとともに教師の研修を支援している．教師達は，週1回の校内研修や長期休業中の校外研修などを通して，学級経営や教科の教授法について学ぶ．管理職もまた学校経営について学ぶ．ユニセフはそのための研修プログラムや，教師が指導上必要な教具の提供も行っている．

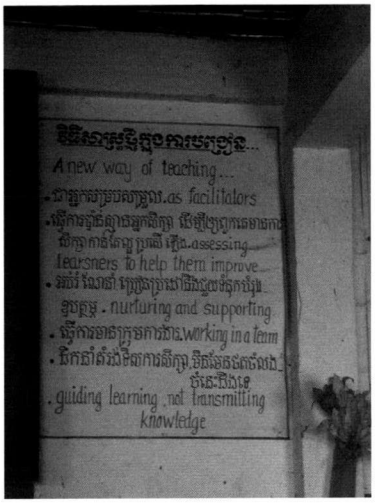
日本同様，CFSでは教師の一方的な「知識詰め込み型」の授業ではなく，子ども中心の「参加型」授業の普及が目指されている．現代の日本の小学校現場は分からないが，参観したCFSの授業は，少なくとも筆者自身が小学校で経験した授業よりもずっと子どもの参加度は高く，大変興味深いものだった．授業の質は非常に高いと感じられる．

しかし小学校も，教師の待遇は極めて厳しい．プノンペン市内の教師でも月給は$40程度で，この収入だけではやっていけないため，大抵の教師は副業を持っているという．教師としての勤務は基本的に午前か午後かの半日なので，空いている半日は家庭教師をしたり，バイク・タクシーの運転手をしたりして，収入を補っている．筆者の見解に過ぎない

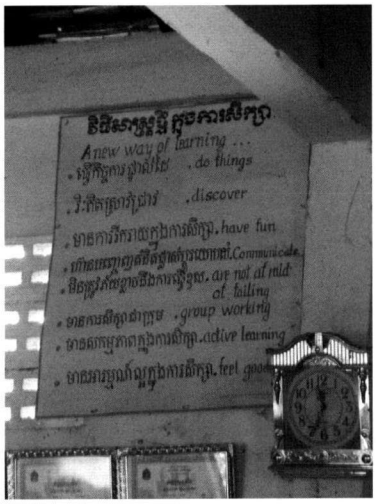


黒板の上にあるのはシアヌーク夫妻の写真

先生の周りを走りながらクメール文字の学習



職員室に掲げられていた「新しい教え方」



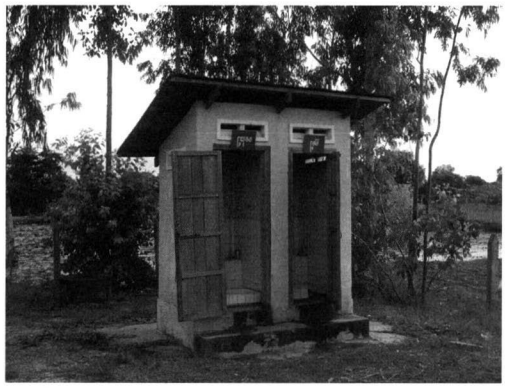
「新しい学び方」

が，教師達は稼ぐのに必死なため，子ども達としっかり向き合う余裕や，授業準備のための時間を充分にとれていない．子どもは教師を通して成長するのだから，教師にはゆとりを持たせたい．教師は他の職業と比べても給料が安いため，カンボジアでは人気のない職業だとのことだが，「子どもが授業で理解を示した時には，教師をやっていて良かったと思う」という言葉には救われる．

＜目標 3＞　安全で衛生的な環境整備

衛生状態の良くない環境で暮らす子ども達にとって，衛生教育は必須である．子ども達が自らを病気から守るためには，衛生的な飲料水やトイレの重要性をしっかりと理解する必要がある．CFS では知識としてそれを伝えるだけでなく，井戸，トイレ，飲料水のタンクを設置している．学校生活を通して子ども達が衛生的な生活を実践し，それを身に着けてもらう狙いがある．

また，内戦時代から埋められたままになっている地雷，HIV や人身売買，児童虐待などから自らの身を守るための知識も，生きていく上でのライフ・スキルとして伝えられる．特に貧しく，十分に栄養を摂っていない子どもの多い地域では，国連食糧計画（WFP）などの協力によって給食も配給される．

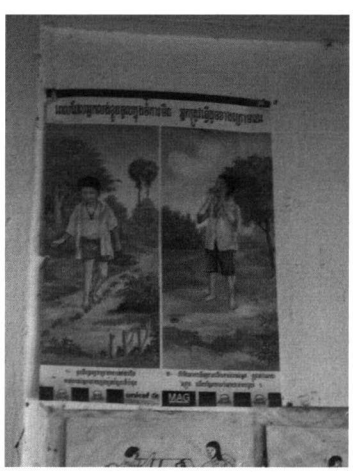


トイレ

トイレ内部

各教室に置かれている飲料タンク
（タンクの上にあるのは濾過器）

日本政府と WFP による給食用の食糧



教室に掲示されていた地雷教育のポスター

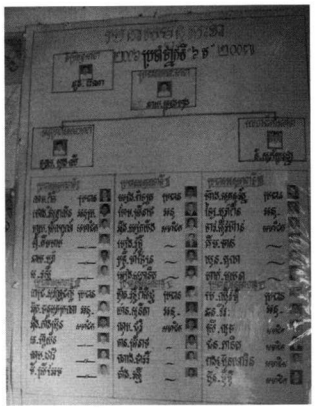
＜目標 4＞　男女平等の実現

途上国では女性の社会的地位が低かったり，女性の教育が軽視されたりしがちだが，CFS では，子ども達にとっても教員にとっても男女平等の環境づくりがなされている．様々な要因で学習の継続が困難な女子児童には，特に注意を払い，支援する体制が整備されている．また教員の側でも，女性を積極的に管理職に登用するなどして，女性の社会進出や地位向上が図られている．

話をしてくれた 2 人の女性副校長

＜目標 5＞　家族や地域の学校参加

学校が教職員だけによって運営される閉鎖的な場にならないよう，CFS では家庭や地域住民，または子ども達自身も学校づくりや学校運営に参加できる体制が整備されている．積極的に家族や地域の人々を学校に招き，学校の意思決定や様々な学校活動に参加してもらおうとするものである．家族を教育活動に巻き込むことで，各家庭での家庭内教育や子どもの自宅学習を充実させたい狙いもある．また，子ども達による各種委員会，児童会などの活性化も図られており，子ども達自身が図書室の本の管理や，花壇の整備などを行っている．日本で行われている児童の自治活動と大きな違いはない．



教室内の児童会組織図

木にぶら下がる鉄の「チャイム」（定刻になると，「チャイム当番」の子どもが棒で叩いて，全校に始業や終業を合図する．）

＜目標 6＞　効果的なネットワークづくり

カンボジアでは毎週木曜日を教員研修の日と定め，教師同士の意見交換や教材交換の場としている学校が多いようだが，ユニセフは学校や地域の枠を超えた，より広域な教師ネットワークの構築を試みている．一人の教師が抱えるローカルな問題であっても，できるだけ多くの教師がその問題を共有し，皆で対応策を考えられるような体制づくりである．小

学校同士の横のつながりだけでなく，中学校や高校との縦のつながり，様々なレベルの行政機関とのつながりも重視した，広範囲な協力体制を敷くことで，互いに資質を高め合っていく狙いがある．

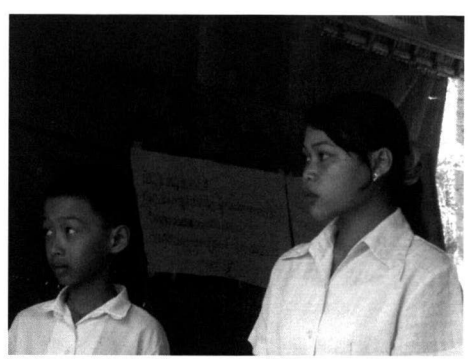
2–2–5　視察報告⑤　子ども保護ネットワーク

1つの村でも暮らす子ども達は多様で，孤児，HIV感染児，障害児，虐待された経験を持つ子どもなど，特別にケアを必要とする子どもも含まれる．子どもが何らかの問題に陥った際には，孤児院，医療機関，専門家によるカウンセリング，奨学金などの照会が迅速にできるためのネットワークが，ユニセフやコミューンによって整備されている．2006年には3,000人以上の子ども達がこのネットワークによって助けられた．

子どもが自らを守るためのライフ・スキルは小学校で教えられているが，それとは別に村レベルでもまた，子ども達を集めての安全教育が行われている．この教室では大人が子どもを指導するのではなく，子ども同士が学び合うことに主眼が置かれる．投票によって選ばれた子どもの代表が，コミューン事務所などで研修を受け，ファシリテーターとなって他の子ども達に安全について考えさせる．視察した教室では，16歳の少女と14歳の少

村の安全教室

体を使って安全と危険を学ぶ



子ども代表の2人

年をファシリテーターに，20人程度の子ども達が様々な活動を行っていた．何が安全で何が危険かを理解するために「安全な絵」と「危険な絵」を描いたり，ビデオを見ながら「危険な遊びをしないで！」という歌をみんなで歌ったりと，ここでも「参加型」の活動が多く見られた．「知らない人についていくのは危険」，「泥沼に入って遊ぶのは危険」といったことを体を動かしながら覚えていく．子ども達はみんな楽しそうだ．ファシリテーターの研修プログラムはユニセフとコミューンが準備し，テレビは近くに住む住民が貸し，電力は車のバッテリーから取り，流れていたビデオはNGOが製作したものだという．国際機関，行政，住民，NGO，そして子ども達自身による連携プレーである．

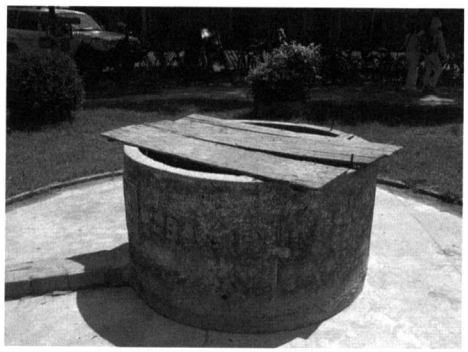
2–2–6　視察報告⑥　井戸

ユニセフの衛生環境の整備事業として，地域の井戸の設置がある．井戸には「丸井戸」と「手押しポンプ式の井戸」の2種類があり，ユニセフとしては「手押しポンプ式」を普及したいとしている．丸井戸は深さ6m程度で，高度な技術を必要とするわけでもなく，安価なので設置もしやすいが，乾季には枯れてしまい，バクテリアや動物の糞が堆積することもある．水を汲み上げるための力も必要な上，子どもの転落もあり得る．その一方で，手押しポンプ式の井戸は40m以上掘るため水の供給は安定しており，衛生上や安全上の心配もなく，子どもの力でレバーを押し下げるだけで蛇口から水が出てくる．丸井戸と比べると技術レベルが高く，費用がかかるというのが普及の難点である．

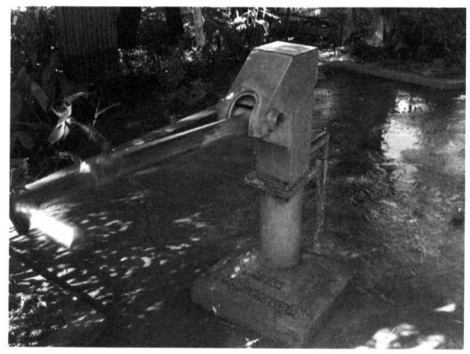
視察訪問した村は乾季には水不足となり，水の確保が特に問題となっていた村である．87世帯534人の人口に対して丸井戸が15ヶ所，手押しポンプ式が3ヶ所に設置されており，手押しポンプ式の1つがユニセフ支援によるものである．この日は酷暑で，子ども達がユニセフの井戸で水浴びをしていた．水量は1時間に3,000ℓ．子ども達は水を体中に浴びて，大喜びで涼んでいた．

手押しポンプ式井戸の設置に際しては，専門家の地質学的な根拠と村民の経験知によって水脈の位置が確認され，土地所有者の了承を得てボウリングの場所が決められる．大型機械によって地中深く土が掘られ，専門家による湧水の水質検査，消毒薬の投与を経て，ポンプが設置される．村の管理代表者5名を決め，安全な使用方法やメンテナンスについての指導を行って初めて住民に開放される．壊れた場合には，住民が修理代を出し合って修理を行うことになっており，あくまで住民による管理，運営が徹底されている．

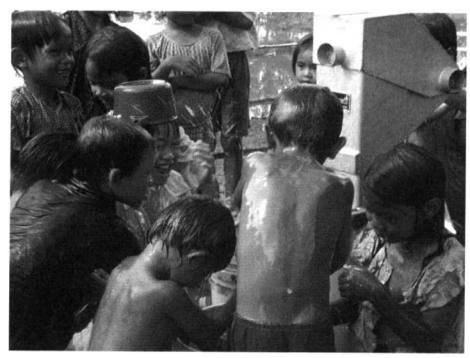
訪問した村のあるコンポントム州では，85%の住民が衛生的な井戸を利用できていない．1つの井戸で賄えるのはおおよそ15～20世帯ということで，87世帯に3ヶ所の手押しポンプ式井戸があるこの村は，相当恵まれているといえよう．ユニセフでは2010年までに，カンボジア全土の井戸の普及率を55%にまで上げることを目標としている．



丸井戸（蓋が閉められて使用されていない）



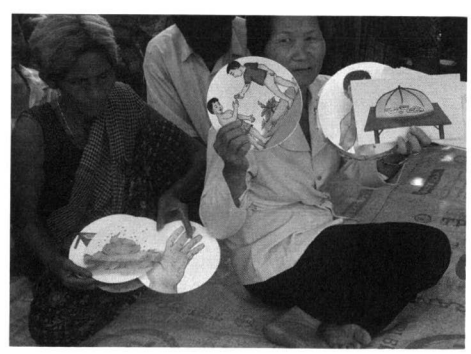
手押しポンプ式井戸



酷暑のなか水浴びする子ども達

2–2–7　視察報告⑦　トイレ

カンボジアにおける衛生インフラは世界最低レベルといわれ，農村人口の84%が「トイレ」で排便していない．いわゆる「自然トイレ」だ．自然トイレは下痢などを引き起こすウィルスやバクテリアの発生因でもあり，子ども達の栄養失調の大きな原因にもなっているが，カンボジア農村部では自然トイレが一般的で，「トイレ」という場所で排便する習慣がない．



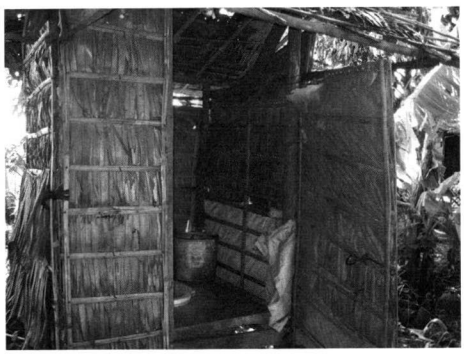
住民が習った衛生教育の教材

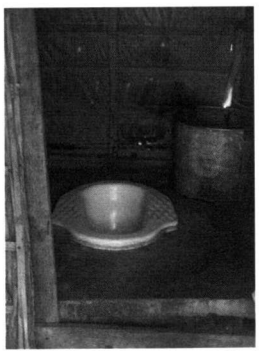
ユニセフでは，便器としてのトイレを一方的に設置するのではなく，住民にその重要性を理解してもらい，自発的なトイレ設置を促したいとして，住民への衛生教育から始めている．住民を10世帯程度の小グループに分け，ステップを通して指導を行う．ユニセフの調査では，住民達が一旦トイレの安全性，利便性，快適さやプライバシーに慣れると，「自然トイレ」に戻ることなく，ずっとトイレを利用

し続けるという．カンボジア全土のトイレ習慣を定着させるために今後200万ヶ所のトイレが必要だと試算されており，ユニセフはその支援を行う．

トイレにもまた，安価な「移動式トイレ」と，地域調査に基づく「簡易水洗トイレ」の2種類があり，ユニセフとしては後者の普及に取り組んでいる．移動式トイレは地面に穴を掘り，廃材で囲いを建てるだけのもので，いっぱいになったら場所を移動していくトイレである．その一方簡易水洗トイレは，地域の人口，住民の排便回数や排便量まで調査され，それに応じた深さの穴が掘られる．便器が置かれ，土管が埋められ，土管の底には石が敷き詰められており，排泄物が地中に返るための工夫がなされている．視察した村には87世帯に71ヶ所の移動式トイレ，6ヶ所の簡易水洗トイレがあったが，ユニセフの衛生教育によって住民の衛生意識が高まり，病気も減ったという．

廃材で作られた「移動式トイレ」





調査の下に作られた「簡易水洗トイレ」

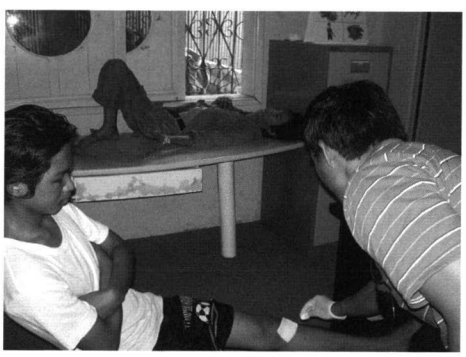
2–2–8　視察報告⑧　NGO

ユニセフは行政機関だけでなく，民間団体（以下，NGO）の活動支援も行っている．政治的に縛られず，自由に活動できるのがNGOの強みだが，寄付や募金だけに頼る収入では資金が限られ，安定した活動ができないという弱みもある．ユニセフは主にNGOへ

の資金提供を通して，その活動を支援している．視察したのは，プノンペン市内でストリート・チルドレンの保護，更正を行う「Korsang」という NGO．一人のアメリカ人女性が設立し，27 名のスタッフは皆，Korsang に救われた元ストリート・チルドレン達である．自身のストリート暮らしの経験を活かして，後世の救済に取り組んでいる．ユニセフは彼らへの給与を援助している．

ストリート・チルドレンを巡る大きな問題は，麻薬中毒，そして注射針の使い回しによる HIV 感染である．カンボジアは東南アジアの麻薬密売ルートにもなっており，国内の麻薬売買は年々増えているという．ストリートに暮らす若者が，未来に絶望し，麻薬に走り，HIV に感染し，広範囲に拡大していく．Korsang は市内に更正施設（以下，センター）を運営し，そういったストリートに暮らす若者に働きかけ，その存在を伝える．重度中毒者はセンターに搬送するが，軽度の場合には無理に連れてくるのではなく，あくまで自発的な来所を促す．時には，その場で注射針使い回しのリスクを伝えた上で，新しい注射針を与えることもあるという．麻薬を無理に止めさせるのではなく，自らの意思で止めさせるためということだが，このアプローチによる実際の更正率は高い．

センターの利用希望者は，入り口で名前を書くだけで，いつでも来たい時に利用できる．



ケガの処置を施す医務室

披露してくれたブレイク・ダンス

ストリート上で拾われた注射針

休憩室で休む中毒者達

利用者は15歳～30歳くらいまでの男性がほとんどで，一日100人程度の来所があるという．一時的に休むだけでもいいし，ストリートに戻りたい時にはその自由もある．センターでは，麻薬へ向かう絶望感を建設的な活動へと転換したいとして，勉強やスポーツや芸術などの様々なプログラムを用意している．クメール語や英語の授業，絵画の授業なども提供されており，バレーボール・コートもある．遠足なども企画する．気持ちのリフレッシュを通して麻薬から遠ざけようとするのである．センター内には医務室もあり，ストリート上でケガをした人の手当ても行う．HIV感染者には処方薬の提供も行っている．

訪問した日，筆者達一行に若者グループがブレイク・ダンスを披露してくれた．来所した一人の若者がたまたまダンスが得意だったため，他の利用者にダンス指導を行い，ダンス・チームとしてプノンペン市内でパフォーマンスを行うにまで至ったという．そのパフォーマンスはエネルギーに満ち溢れ，若者のプラスのパワーを十二分の感じさせるものだった．

第3部　カンボジア訪問，ユニセフの活動視察を終えて

首都プノンペンから，ユニセフの車両5台で300キロと農村地帯を北上した．ユニセフの活動視察や，ユニセフの現地スタッフ，州政府やコミューンの行政官，住民達とのミーティングを経て，5日後に北の都シェムリアップへ入った．シェムリアップからプノンペンへは，飛行機で南下して戻ってくるという1週間の行程である．

当初「カンボジア」と聞いて浮かべる言葉は，「ポル・ポト」，「貧しい」，「アンコール・ワット」くらいだったが，やはりこの3つのキーワードはカンボジアを的確に捉えている．ポル・ポト時代の傷跡が今なお残り，人々は貧しい．世界に誇るアンコール遺跡は荘厳で，観光拠点のシェムリアップは観光客で賑わう．多くの人が持つカンボジアのこうしたイメージは誤っていない．しかし，その歴史を知り，実際に農村部を回り，必死に生きようとする住民とそれを懸命に支えようとする人々と接して感じたカンボジアの姿は，そんなステレオタイプ的なイメージほど薄っぺらいものではない．1週間の滞在とその後のカンボジアを日本で追ってきた感想を，思いつくままに最後に記したい．

3–1　壮絶な過去を経て

ポル・ポト派幹部の集団殺害罪を裁く特別法廷が，2008年春から審理を開始する．1993年，ポル・ポト派の政治活動が非合法化されてから実に15年．2004年，カンボジア政府と国連による協同運営の法廷設置が確定してからも4年の歳月が流れている．ポル・ポトを始めとする主要な政権幹部は既に死亡しており，存命の幹部も70代後半を迎えている．2審制で終身刑を最高刑とする裁判の意義も問われるが，開廷の遅れは，国内法での裁きを主張するカンボジア政府と，国際法廷を求める国連との対立にある．国内外から裁判官や検察官が選ばれ，「国際水準を持つ国内法廷」として動き出してはいるが，現カンボジア政府には元ポル・ポト派もおり，80年代にポル・ポト派を支持していた西欧先

進諸国にとっても自分達への責任追及があり得るとして，その裁きの動きは極めて鈍い．裁判の運営予算 5,600 万ドル（約 68 億円）のうち日本が 2,160 万ドルを負担しており，元東京地検検事が 2 審裁判官として参加もしている．判決そのものの効果は別に，ポル・ポト時代に家族を失った遺族は，裁判が行われなければ「最低限の正義すら果たされない」として法の裁きを待ち望んでいる．今後の審理を見守りたい．

過去の清算が進められる一方で，現在のカンボジアではポル・ポト時代を知らない人口の方が多くなっている．基礎教育も不十分な国で，歴史教育までの余裕がないのが実態なのだろうが，信じ難い弊害も見られる．プノンペンの南へ車で 3 時間の場所に，虐殺の犠牲者が眠る集団埋葬地，通称「キリング・フィールド」の 1 つがあるが，連日延べ 100 人以上の農民が，金品目当てに土や人骨を掘り返していたという（2007. 7.10 読売新聞）．主に 80 年以降に生まれた惨劇を知らない世代の仕業だが，「約 30 年前に死んだ人がたくさん埋まっているようだが，どうでもいい．大事なのは，金目のものがあるかどうか」，「『ポル・ポトの虐殺』とか，生活に関係ないし，よく分からない」と語る．実際，妻と幼い娘の 3 人家族の 28 歳男性は，金のネックレスを掘り当て，300 ドル相当の牝牛と交換し，暮らしも良くなっているという．虐殺犠牲者の眠る「キリング・フィールド」はカンボジア各地にあるが，決して繰り返してはならない歴史を語る場で，宝探しが行われているという実態．歴史を知らず，ただ生きるためにやっている以上は，農民の歴史教育と生活向上を併せて図っていくしかない．

ポル・ポト時代の文書や証言を集める「カンボジア記録センター」の 26 歳の男性は，カンボジアの負の歴史をまとめた高校教科書を 2007 年 5 月に出版しているが，教育省の協力が得られず，副読本扱いになっているという（2007. 9. 6.読売新聞）．「政府にはポト派として活動歴のある人もおり，負の歴史を封印したいという思惑を感じた」と語る．自分が受けてきた学校教育では，ひどい拷問や殺戮の話ばかりで，なぜ起こったのか，誰が悪いのかなどが曖昧になっており，それをはっきりさせる必要があったと話す．歴史教育の量的拡大だけでなく，質的向上もまた，政府が真正面から取り組むべき課題である．

どこの国でもあることだが，行政官や地域担当者による汚職も大きな問題となっている．政府と援助機関との定例会議では，必ず汚職の話題が上るという．多くの国際機関，各国の ODA や NGO が一丸となって国家再建，人道支援を行っているなか，それを個人的に利用するような不正は腹立たしくも悲しくもある．権力者が私利私欲に走る腐敗は先進国にも多いが，自立した国家としてゼロから立ち上がろうとしている今だからこそ，カンボジアには国民一人ひとりに確固たるモラルを期待したい．実際，大多数の人々は信仰深く，自分達の手で地域の生活改善，環境改善に熱心に取り組んでいる．生活の便利さにどっぷり浸かり，他人任せの日本人こそが学ぶべき点も多い．問題となっているのはごく一部の人間に過ぎないのだろうが．

3–2　プノンペン

プノンペンの街並みは美しい．ポル・ポト時代前，フランスの植民地だった影響が色濃く残り，「東洋のパリ」と呼ばれていたというが，その名残は感じられる．外資系の大型ホテルや高級レストランの高級感は，何ら西欧と変わらない．日本でいう「道路交通法」がなく，ワゴン車の屋根に10人近く乗っているタクシーや，3人，4人，時には赤ん坊まで乗っているバイクなど，日本の感覚では考えられない光景も多いが，それもまたプノンペンの一風景である．

職を求めて農村から流入してくる人口が増えており，それに伴って物乞いも多い．王立博物館やツールスレン博物館などの観光地には，顔面や手足に障害を持った物乞いもおり，思わず目を背けてしまう．市内にある王宮は，ポル・ポト時代，シアヌーク国王が事実上の軟禁状態にあった場所で，現在も国王一族が住む美しい場所である．観光客で賑わい，土産物屋もあるその広大な敷地の一角に，アンコール・ワットのミニチュアが置かれている．アンコール・ワットに行くことのできないプノンペン市民が，この前で祈りを捧げるのだという．カンボジアを訪れる一般的な観光客はプノンペン市内とアンコール・ワットを回るのだろうが，市民はこのミニチュアをアンコールとして崇める．複雑な思いだ．

広大で荘厳な王宮

王宮内にあるアンコール・ワットのミニチュア

3–3　ユニセフ・カンボジア事務所スタッフ

ユニセフ・カンボジアには140名以上のスタッフがおり，プノンペン本部の他，40名以上が7つの地方事務所に勤務する（2005）．任地としてカンボジアに駐在する多国籍のインターナショナル・スタッフと，現地で採用されるカンボジア人のナショナル・スタッフから成っており，インターナショナル・スタッフには任期や他国への異動があるが，ナショナル・スタッフは原則として国外に出ることはない．この両者が協力し合って，ユニセフ・カンボジアとして全国的に活動を展開している．

プノンペン本部では，日本人を含むインターナショナル・スタッフ達とのミーティングがあった．アフリカや他のアジア諸国での駐在経験もある方達で，プノンペンは暮らしや

すい方だという．皆明るく，冗談も飛び交うなかで，丁寧に分かりやすくユニセフの活動について説明してくれた．また，小学校から高校までの教員を前に，日本の子ども達の意識を高めてほしいという願いも強く感じられた．フランス人スタッフはこう話す．「ユニセフ募金は日本が一番多い．ユニセフについて学習している国は募金金額も高く，サポーターも多い．最終的にはユニセフでなくてもいい．厳しい境遇にある子ども達の支援に関わる子どもを育ててほしい」．

農村部の活動を案内してくれたのは，地方事務所のナショナル・スタッフ達だった．彼らの地域復興やカンボジア再建に懸ける思いには，ただ頭が下がるばかりだ．長時間移動の車内でいろいろと話す機会も多く，一人のスタッフはこう話していた．「他国でできるような登山，ハイキング，サイクリングもやってみたいし，スポーツ観戦もしたい．しかしカンボジアには山がなく，暑くてハイキングやサイクリングもできない．プロ・スポーツもない．それでもカンボジアが好きだ．カンボジアは離れられない」．経済学の元大学教授だったという彼は，国の復興のために自分の知識を活かそうとユニセフに入った．現場での労働環境は決して快適なものではなく，地域の行政官や住民にも気を遣うことが多いだろう．お酒を交えた夕食の際には，日本についてもいろいろと訊かれ，日本の物価や住宅事情に驚きを示していた．優秀な人達であることは間違いないが，特別な人達というわけでもないのだろう．その使命感や信念が地域復興の大きな原動力となっている．

移動のほとんどが5台のランドクルーザーだったが，それぞれのドライバー達もまた印象的だった．ネイビー・ブルーのワイシャツに紺のズボンがユニセフ・ドライバーのユニフォーム．運転中は無口だが，話しかけると愛想良く返答してくれる．農村地帯の凸凹道を，平坦な部分を選びながら時速100キロ以上で走る運転技術も凄い．筆者達一行が，地元では高めのレストランで食事を摂っている間，ドライバー達は通りの屋台で食事を済ませ，一行が戻ってくるのを待つ．シェムリアップまで送り届けた後は，一息つく間もなくプノンペン本部まで帰っていったが，淡々とユニセフ・カンボジアの足を担う彼らの寡黙さの中にも，国家再建への強い思いがあることだろう．

「ユニセフ・キャラバン隊」

ボンネット右側にある巨大な無線アンテナによって，カンボジアのどこからでも通信が可能

ドライバー達と

3–4 最後に

英語教師である筆者が開発問題に関心を持ったのは，「何のために英語を教えるのか」という自問自答の過程においてである．帰国子弟も多い本校で，「ペラペラ」な高校生は多い．それでは何のために「ペラペラ」になる必要があるのかと考えると，「大手企業に就職するため」という答えは教師として極めて空しい．グローバル化している企業活動で英語力は必須だが，「大手企業に就職して何をするのか」という先を考えさせたいのが筆者の思いである．

世界の貧困は着実に改善している．改善状況を表すデータは，文献やインターネットを通して数値として簡単に調べることができるが，その数値の上昇は，現場のこうした地道な努力の成果だということを忘れてはならない．森の中で，酷暑の中で，何もない中で，目に見える成果がすぐには表れない中で，長期的な視野を持って継続的に活動していくことは想像以上に過酷だ．住民もスタッフも一生懸命である．途上国援助の基本姿勢は，モノを提供することではなく人を育てること．地域の伝統や慣習を尊重しつつ，住民と協力し合っていくこと．机上で学んだ理論だが，それが実際に行われている現場を目の当たりにし，援助する側とされる側の根気と努力には感服を覚える．

わずか1週間の滞在で，カンボジアの真の姿を見たとは当然思っていない．日本からの教員一行であれば，一過性のビジターであり，ドナーでもあるので，住民がいい顔をしないわけがない．ユニセフの支援が入っているというだけでもその地域は恵まれており，事態がもっと深刻な地域の方がむしろ多いのだろう．それでも，カンボジアの将来性はひしひしと感じる．人々の，壮絶な時代を生き抜いた逞しさ，仏教を厚く信仰する心，過去を割り切り次世代に懸ける思い．こうした全てがカンボジア再生の力である．アプサラ・ダンスやスバエク・トムなどの文化力もフルに発信して，そのパワーを国際社会にアピールしてもらいたい．繁栄を極めた西欧先進諸国が失ったものを大切にしてもらいたい．そうしたカンボジア独自の発展を今後も期待し，見守り，日本でできることを通して支援していきたい．

筆者達の訪問を歓迎して下さった地域住民，関係機関，カンボジア政府．忙しいなか時間を割いて活動の説明や案内をして下さったユニセフ・カンボジア事務所．ツアーを主催，企画して下さった日本ユニセフ協会．日本全国から集まり，各学校の国際理解教育の取り組みを紹介して下さった10名の先生方．こうした素晴らしい方々との出逢いがなければ，本研修はこれほどまでに有意義なものにはならなかっただろう．今後もさらなるつながりを願いつつ，関係した全ての方々に心から感謝申し上げたい．

＜参考文献＞

上田広美・岡田知子（2006）「カンボジアを知るための60章」明石書店
藤原幸恵（2006）「ユニセフ・カンボジア事務所で働く」明石書店
日本ユニセフ協会（2007）「カンボジア・スタディーツアー報告書」日本ユニセフ協会
山田 寛（2004）「ポル・ポト＜革命＞史 －虐殺と破壊の4年間－」講談社
Clerk, Christian (1996) UNICEF for Beginners, Writers and Readers Publishing
UNICEF Cambodia (2005) UNICEF Cambodia at a Glance, UNICEF Cambodia
UNICEF Cambodia (2007) Study Tour Itinerary and Information UNICEF Cambodia

＜参考記事＞

2007. 2.11. 朝日新聞「虐殺裁判 真の供養のためにも」（貝瀬秋彦）
2007. 6. 8 読売新聞「日本企業誘致するカンボジア」（菊池 隆）
2007. 6.14. 東京新聞「ポト派法廷 来春にも審理開始」（大場 司）
2007. 7.10. 読売新聞「墓荒らし横行 カンボジア」（田原徳容）
2007. 7.12. JICA プレスリリース「起草に協力したカンボジア民訴法が適応へ」
2007. 9. 6. 読売新聞「ポル・ポト時代 教科書に」（田原徳容）
2007.12.28. JICA プレスリリース「カンボジアが新しい民法を公布」

＜参考 HP＞

外務省 カンボジア情報 http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/index.html

月日	時　間	場　　所	研　修　内　容
7／22 日	8：30	成田空港集合	第1ターミナル4F　南ウィング　Fカウンター
	10：50	成田空港発	全日空NH953でバンコクへ
	15：25	バンコク着	各自　夕食
	18：10	バンコク発	バンコク・エアウェイズPG4935でプノンペンへ
	19：20	プノンペン着	出迎え，ホテルへ移動
	20：00		ホテル到着
			(Sunway Hotel, Phnom Penh 泊)
／23 月	9：00	プノンペン	ユニセフ・プノンペン本部にてブリーフィング
	10：00		政府関係者（教育省・女性問題省）とのミーティング
	11：30		昼食（ユニセフ・プノンペンスタッフ達と）
	13：00		プレイベン州へ移動
	15：30	プレイベン	子ども保護ネットワーク　訪問
	17：30		ホテル到着
	18：30		夕食（ユニセフ・プレイベンスタッフ達と）
			(Round Damrei Thmei Hotel, Prey Veng 泊)
／24 火	8：00	プレイベン	カンダク小学校　訪問
	9：00		保健センター　訪問
	10：30		コミューン事務所　訪問
	11：30		コンポンチャム州へ移動
	12：00	コンポンチャム	昼食
	13：00		コンポントム州へ移動
	15：30	コンポントム	クロン小学校　訪問
	18：00		ホテル到着
	18：30		夕食（ユニセフ・コンポントムスタッフ達と）
			(Arunras Hotel, Kampong Thom 泊)
／25 水	7：30	コンポントム	ベンコール村の幼稚園　訪問
			サンコール村の幼稚園　訪問
	10：00		サンコール小学校　訪問
	12：00		昼食
	14：00		ロピークペン村の衛生プログラム（井戸・トイレ）　視察
	18：00		夕食
			(Arunras Hotel, Kampong Thom 泊)
／26 木	8：00	コンポントム	州政府関係者とのミーティング
	9：30		シェムリアップへ移動
	11：30	シェムリアップ	ホテル到着，昼食
	13：00		アンコール・ワット見学
	18：00		夕食
			(Hotel Apsara Angkor, Siem Reap 泊)
／27 金	10：20	シェムリアップ発	シェムリアップ・エアウェイズFT826でプノンペンへ
	11：00	プノンペン着	出迎え
	12：00	プノンペン	昼食（ユニセフ・プノンペンスタッフ達と）
	13：30		NGO（Korsang）訪問
	15：00		ユニセフ・プノンペン本部にてデブリーフィング
	18：00		夕食
			Sovanna Phum Khmer Art Associationにて伝統舞踊見学
			(Sunway Hotel, Phnom Penh 泊)

月日	時　間	場　　所	研　修　内　容
／28 土	10：00	プノンペン	市内見学 ・王立博物館 ・王宮 ・Watthan Artisans Cambodia（障害者の職業訓練所，土産物店） ・ツールスレン博物館 ・マーケット見学
	18：00		空港へ移動
	20：10		バンコク・エアウェイズ PG4936 でバンコクへ
	21：20	バンコク着	各自　夕食
	23：55	バンコク発	全日空 NH916 で成田へ （機内泊）
／29 日	8:05	成田空港　着	解散